

第7回 飛騨高山学会 2025.11.29～30

# 国際観光都市飛騨高山から学ぶ

～人と自然を活かした持続可能なまちづくりとは～

長崎大学 環境科学部

平尾 聖羅

大石 向日葵

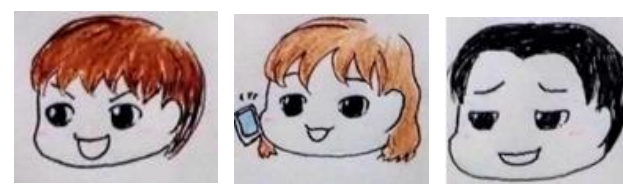
松崎 美海

黒田 暁





長崎から来ました！



2024年11月28日～12月1日 長崎大学環境科学部  
環境社会学・地域社会学研究室（黒田 暁）

## 「国際観光都市・飛騨高山から学ぶ」

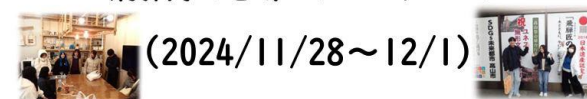
### 「2024年度のゼミ調査合宿の内容」

- 2024年11月29日：○野麦学舎保存会事務所にて高嶋様にヒアリング  
○高山市総合政策課・環境政策課・観光課に高山市情勢のヒアリング  
○飛騨古川町にて観光協会齋藤様にヒアリング  
11月30日：○飛騨古川町にて「ヒダスケ！」主催の「瀬戸川の鯉の引越し2024」に参加体験 参加者・地域住民にたいするヒアリング  
○NPO法人まちづくりスポットの見学と本間様にヒアリング  
○ハッピープラス山腰様に街歩きのご案内をいただき、ヒアリング  
12月1日：○宮川朝市にて、宮川朝市協同組合員複数名にヒアリング



3年ゼミ調査合宿

飛騨高山地域フィールドワーク



(2024/11/28～12/1)

小論考集・調査報告



長崎大学環境科学部【環境政策コース】環境社会学研究室

◎ 国際観光都市・飛騨高山の魅力と地域資源の豊穡に学ぶ

◎ 国際観光都市・飛騨高山の地域課題への向き合いに学ぶ

# ◎ 国際観光都市・飛騨高山の魅力と地域資源の豊穡に学ぶ

## ○多彩な観光資源（文化・自然）の魅力

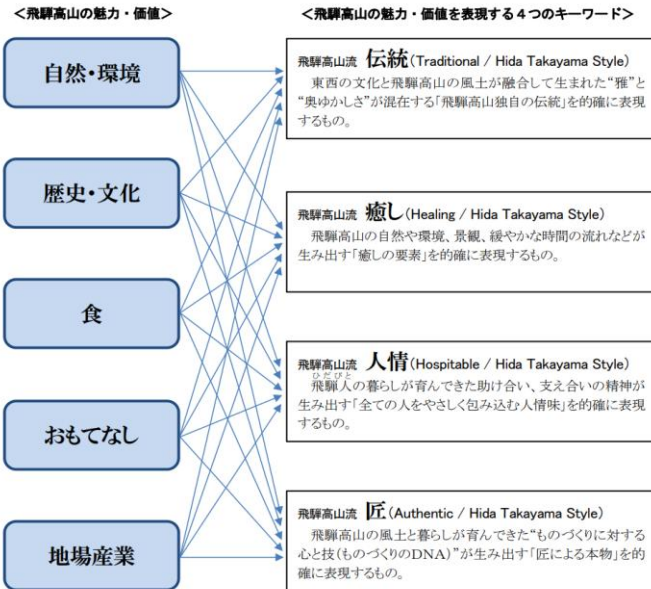
高山市は、“日本一広大な市域”の90%以上が森林で占められており、山、川（水）、渓谷などの自然資源が豊富にあるとともに、自然景観に囲まれた集落や棚田などの文化的景観の複合（林上,2018）が特徴。白川郷や下呂温泉等近隣の観光地とのアクセスも連続的であり、観光振興のさらなるポテンシャルも期待される（石谷,2023）

⇒今ある多彩な地域資源を組み合わせ、新たな魅力や吸引力を引き出す創発性（資源活用の術）に注目



## ○「国際観光都市・飛騨高山」の市民意識と社会関係

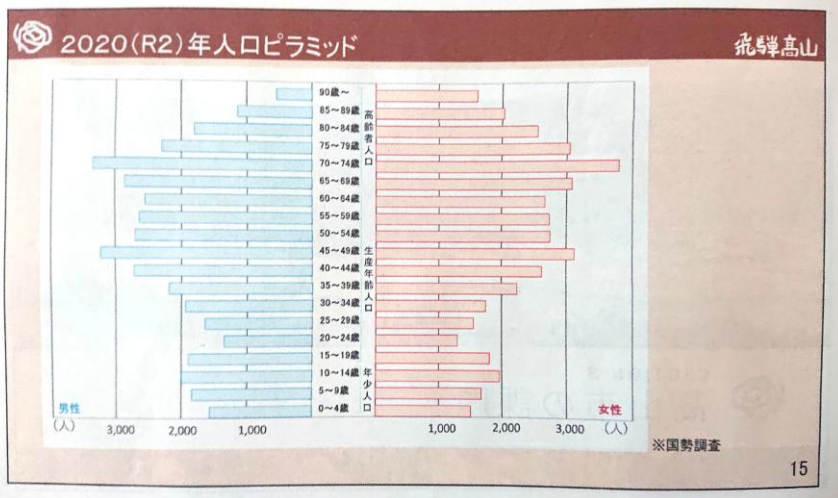
高山市の中心市街地は城下町としてだけでなく、飛騨一円における唯一の商業経済活動の中心地を形成。急激な開発を経験しなかったことと、戦災を免れたことで、後に「歴史的な町並み」として評価を得た。また、これまでさまざまな映画やアニメの作品の舞台やロケ地として注目されてきた（山元ら,2016）一方で、1986年の「国際観光都市」モデル選定（宣言）から外国人観光客の誘致を積極的に展開。2009年から「おもてなし国際化推進事業」を実施、国内有数のインバウンド観光地に成長してきた。観光客の属性としてリピーター率が顕著（羽生ら,2006）  
⇒高山の人びとの地域アイデンティティ・受容力・コミュニケーション（社会関係）資源の源泉を探る



飛騨高山の魅力・価値と4つのキーワード  
（『飛騨高山ブランド指針』2025より）



# ◎ 国際観光都市・飛騨高山の地域課題への向き合いに学ぶ



## ■ 生産労働力の低下とコミュニティの衰退（地域活力の課題）

高山市においては2020年時点で高齢者人口の割合が増大傾向で、いわゆる“西洋の棺桶型”の形状を示す。現状のまま移行した場合、25年後の2050年までには、人口は収縮し、**労働力人口よりも非労働力人口の構成比が多くなる**見込み（高山市）

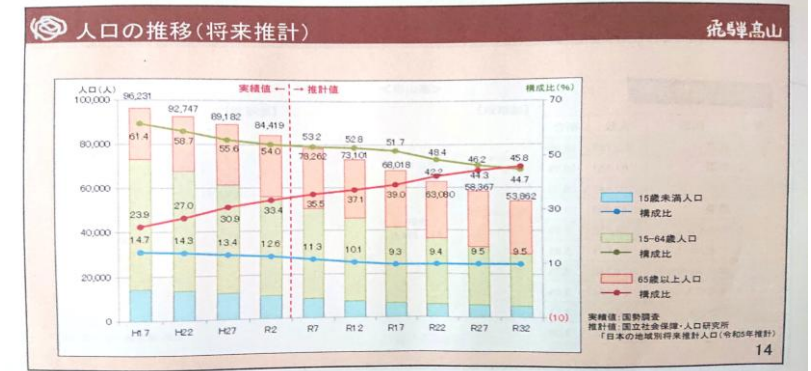
⇒ **生産労働力の低下が、コミュニティの衰退や資源管理の粗放化を招き、居住環境をさらに悪化させる負のスパイラル**

2020年時点の人口ピラミッド（高山市提供資料より）

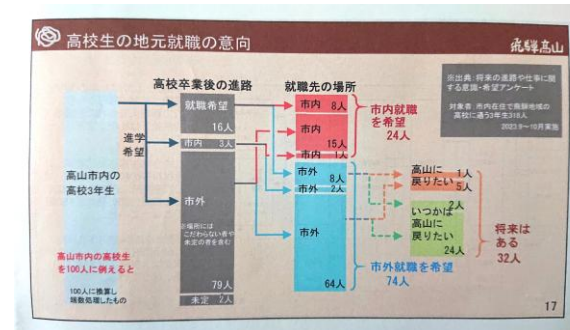
## ■ 縮小する地方都市の未来（持続可能性の課題）

少子高齢化・縮小社会化が先鋭化すると、産業構造もまた、収縮を余儀なくされる。**地元出身の若者たちの中で、地元で働きたい、もしくはいったん高山市を出るが、いつかは戻ってきたいという層が現在是一定数いる**（高山市、竹内ら、2020）が、**諸産業の収縮化がとまらない地元には「いつか」戻ることもできず、「人口減少・若者流出」傾向一方となるまちの将来の見通しは極めて厳しくなる**

⇒ **少子高齢化・縮小社会化に抗おうとするだけでなく、状況に適応する継続性とその創意工夫のあり方とは**



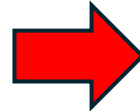
2050年までの人口将来推計（高山市提供資料より）



高校生たちの地元就職意向  
（高山市提供資料より）

# 地域資源の活用による持続性の創出と“開かれたコミュニティ”のあり方とは

〈課題〉 生産労働力の低下とコミュニティの衰退・縮小する地方都市

 「国際観光都市・長崎を地元とする三者の視点から、飛騨高山に学ぶ」

- 平尾    ボトムアップ型の地域創生に必要な視点や要素に注目し、  
          コンテンツツーリズムによる地方都市の持続可能な展開を問う
- 大石    地元側と観光客側のコミュニケーションの視点に着目し、  
          インバウンドと観光地が共生する持続可能な観光のあり方を問う
- 松崎    保全活動を持続可能にするかかわりの様式について、  
          “地域内”住民にとらわれないコミュニティの関係性から問う

「観光」と「自然」・「文化」環境とのあいだにあるものに  
着目してアプローチをはかる

# 1, コンテンツツーリズムの持続可能な実践 (平尾 聖羅)

## 目的

「ポストマスツーリズム時代に求められるボトムアップ型の地域創生(地域主体性)に必要な視点や取り組みを明らかにし、コンテンツツーリズム(聖地巡礼)が地方都市の持続可能な発展の糸口となるのか模索すること」

## 問い「コンテンツツーリズムに宿る持続性とは」

- ・地元住民に対してオーバーフローを生み出す可能性(宋ら.2022)  
= オーバーツーリズム
- ・作品に関するイベントなどが一過性に終わることが多い(増淵.2009)  
= 継続性

## 視点 “オタクの間に広がるコミュニケーションとコミュニティ”

「アニメ聖地巡礼者の特徴・特性」(岡本.2024)

- ・アニメで用いられた風景を撮影し、情報をインターネット等で発信する。
- ・現地の人やファン同士の交流を楽しむ。

→ アニメ作品の聖地巡礼は、今後の地域づくりに必要なファクターに成り得るのか。

# 高山市観光課でのヒアリング調査

## 「氷菓」

2001年に刊行された米澤穂信(岐阜県出身)の推理小説「<古典部>シリーズ」の第一作であり、著者のデビュー作

2012年、テレビアニメ化及び漫画化  
→斐太高校や古い町並をはじめとする高山市の多くの建造物や町並、風景がアニメ「氷菓」の舞台となっている



斐太高校



(学校見学サイトプチキャンより引用)



宮川朝市



(じゃらんnetより引用)

## 観光課×アニメ「氷菓」の取り組み

時期	取り組み内容	制作物
2012年～2013年	雛まつりスタンプラリー(生きびな祭とコラボ)	舞台探訪マップ ポスター
2014年	高山本線全線開通80周年記念スタンプラリー	スタンプ チラシ
2019年	チラシ	舞台探訪マップ (英語版)
2022年～2023年	重ね捺しスタンプラリー	限定パッケージ 紅茶 PR動画
2024年	高山本線全線開通90周年記念スタンプラリー	※岐阜県主催

高山市のアニメ「氷菓」に関する取り組み(時系列)  
(調査でいただいた資料より引用)



# 高山市観光課でのヒアリング調査

取り組み中の課題

- ・ 版權に関する認可のための原作者やプロダクション側との交渉
- ・ 必ずしも成果の保証がないイベントの企画立案

一方で、

- ・ スタンプラリー期間中の観光客による“**SNS投稿**”
- ・ まるっとプラザ内に設けられた「氷菓」コーナーでのファンの交流  
といったファンの行動も見られた



まるっとプラザ内の「氷菓」交流コーナー  
(まるっとプラザHPより引用)

SNSの普及がもたらすもの

「アニメにおける聖地巡礼の主導者」(山村.2011)

- 従来
- ①地域側のみ
  - ②製作者側のみ
  - ③地域と製作者の両方

- 未来**
- ①地域側のみ
  - ②製作者側のみ
  - ③地域と製作者の両方
  - ④観光客(聖地巡礼者)**

新たな4つ目のパターン

観光客(聖地巡礼者)は行政や企業を通すことなく、“**個人**”が間接的な情報発信・情報収集を行う。

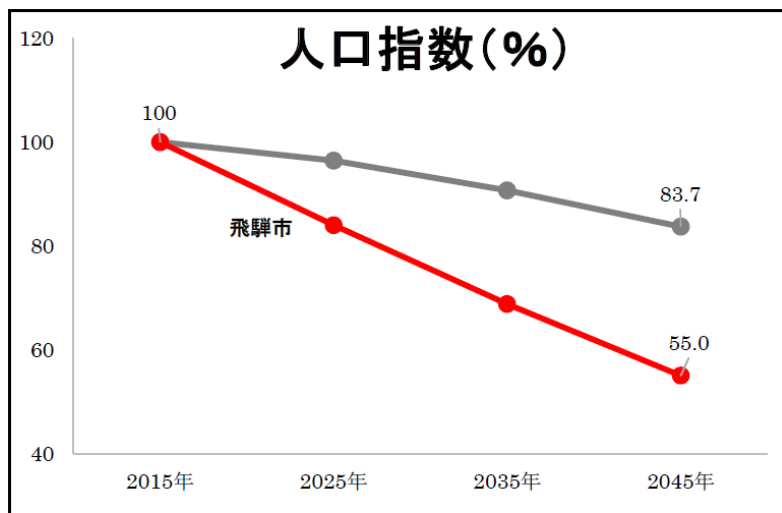
→従来に見られたコンテンツの権利、費用の障壁がない。



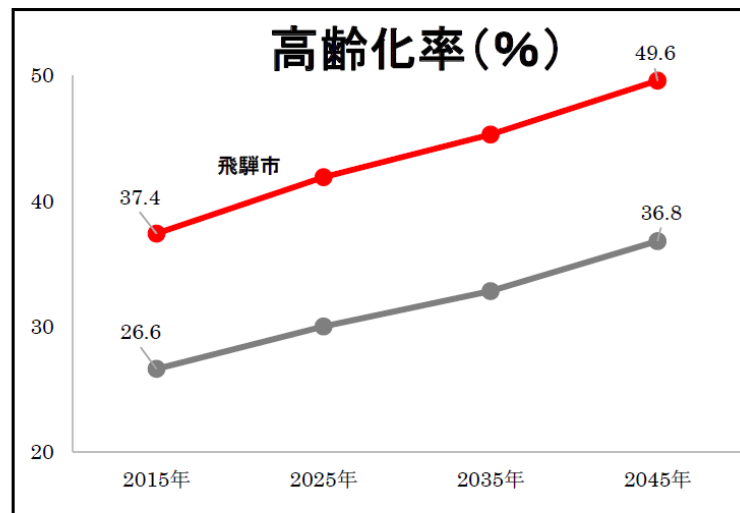
# 飛騨市観光協会でのヒアリング調査

## 業務内容

- ・地域住民が生きがいと誇りのもてる魅力ある地域づくりの推進
  - ・時代に即応した人づくりと観光理念の普及
- 特に人口減少・高齢化現象に対する積極的な地域再生の取り組みや関係人口の考え方の実践・展開が特筆される。



飛騨市はこの30年で**全国の倍のスピードで人口減少**する過疎地域



飛騨市はすでに**日本の30年後を上回る高齢化率（65歳以上）**

飛騨市の人口減少と高齢化の推移予測(調査でいただいた資料より引用)



飛騨市観光協会へのヒアリング調査の様子  
(2024年11月29日撮影)

飛騨市は“**人口減少先進地**”

→地域の生活をどのように維持していくのか？

Point：地域外との繋がり

II

**関係人口** +  $\alpha$

# 飛騨市観光協会でのヒアリング調査

関係人口の創出・拡大のための取り組み



## 「飛騨市ファンクラブ」

飛騨市に興味関心を持つ人々と、つながり、集い、語り、飛騨市をさらに楽しむことを目的としたコミュニティ(2017年設立)  
現在、約1万5千人が会員となっている。

STEP1：ファン会員との交流会(都市圏)  
STEP2：バスツアー、ファンの集いの開催  
STEP3：ふるさと納税からファン誘導

→会員との交流により、遠方に住むファンの地域貢献意識が芽生え、スタッフとして手伝いたいと遠方から飛騨市に来るファンが続出している。

## 「ヒダスケ」

地域の人と体験でつながり、オカエシがもらえる参加型プログラムで、「“ヒダ”を“タスケル”ボランティア」という意味で誕生

- ①市民の困りごとに対して参加者を募集
- ②参加者の交通費等は自費。旅する感覚で参加
- ③参加者には“オカエシ”を準備

→住民の困りごとを解決するだけでなく、移住者が地域住民とつながる仕組みとしても機能している点を評価。関係人口以外の側面においても可能性を見出している

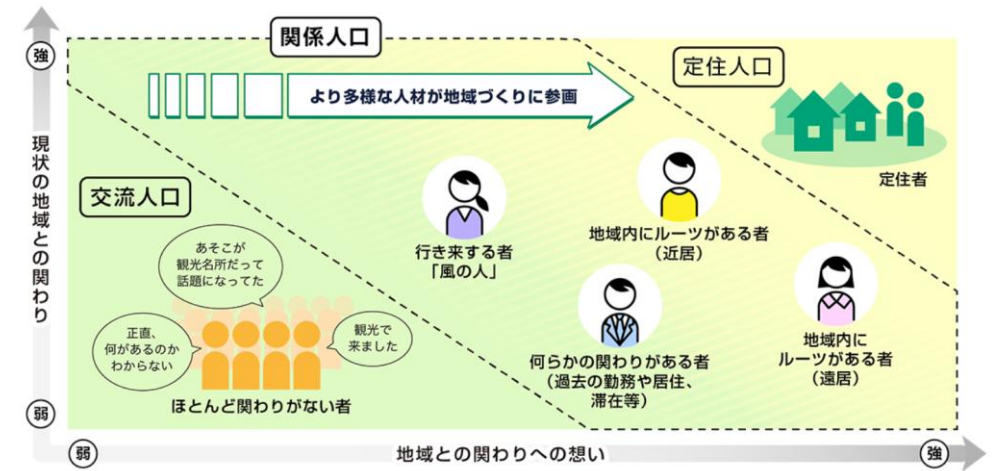
“うれしい！楽しい！面白い！”を共有できる体験を提供し、観光交流と地域消費の間口の拡大を目指す



# コンテンツツーリズムに宿る持続性とは(考察)

交流人口の位置関係から、例え地域が移住者を呼び込むとしても、その地域とのかかわりや知識がない交流人口がいきなり定住人口に発展することは考えにくい。

少子高齢化が進み人口減が予想される今後において、定住人口増をめざすよりも交流人口を増やして経済効果を狙う方がより現実的である。(増淵.2009)



関係人口の概念図(総務省HPより引用)

単発的な「交流人口」でもなく、いきなり移住する「定住人口」でもなく、その間にあるような地域とのかかわりを持続的に育んでいくような「関係人口」が移住に限らず、その地域とさらに深いかかわりをもつための、開かれた「間口」の1つとなっていく。

**「関係人口」創出のために・・・**

アニメファンの間に見られる主体的に情報を見つけ、口コミで新たに情報を追加して繋げていくような観光行動こそがコンテンツツーリズムの参加者を単なるコンテンツの消費者から、地域とかかわりを育んでいく関係人口へと深化させるのでないか。

## 2, 双方向の観光コミュニケーションを育む（大石 向日葵）

### 目的

インバウンドと観光地の共生のため、観光地をめぐるコミュニケーションのあり方に着目し、一方通行や行き違いの問題としてのオーバーツーリズムを捉え直し、**双方向のコミュニケーション**から**持続可能な観光**を実現する道筋を探る。

### 個人の問い

今後も増加していくと予想されているインバウンドと共生していく一つの手段として、観光客と地域側、双方向のコミュニケーションをはかることで、持続可能な観光のあり方や観光地づくりに繋げる可能性を論じる。

### 学術的問い

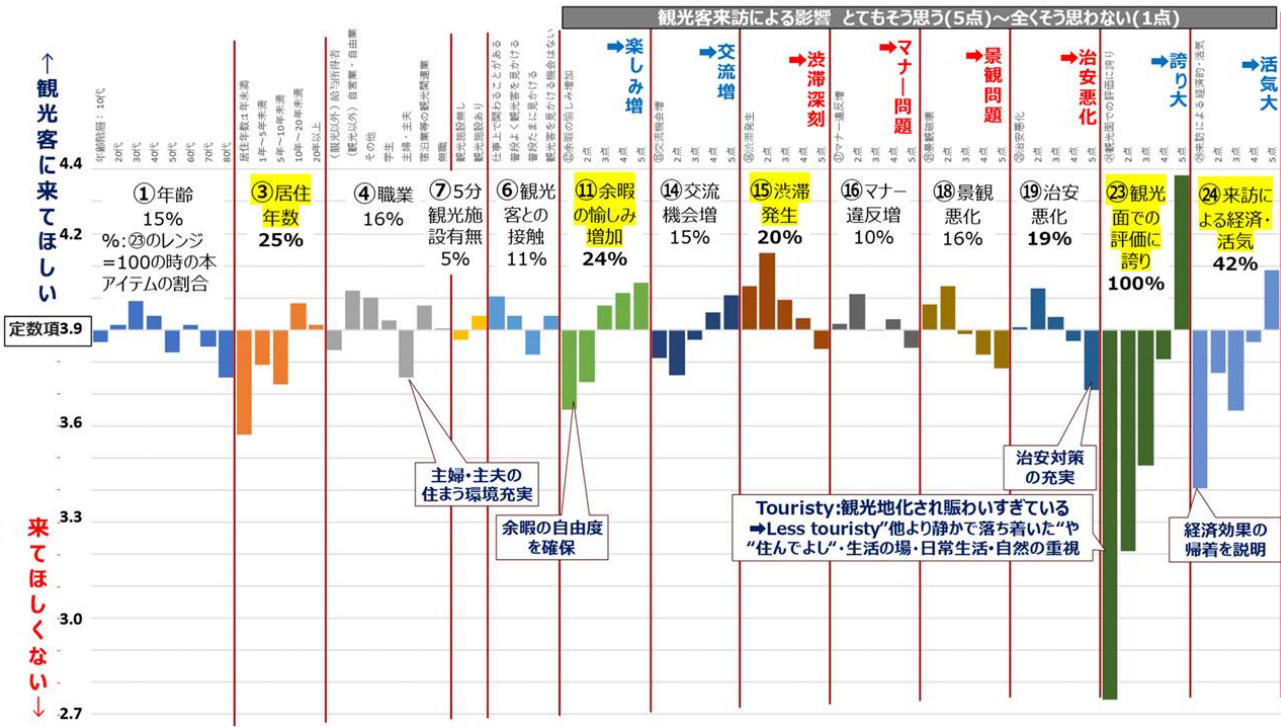
- ・外国人観光客は現地でのコミュニケーションが十分に取れず、旅行者のストレスとなっている。（中野,2019）
- ・地方創生、経済成長などの経済面だけに着目せず、オーバーツーリズムにならないように配慮しつつも、多文化共生という視点も考慮しなければならず（森,2019）、観光コミュニケーションや、異文化理解の観点からのコミュニケーション論の検討。



# 高山市の観光客来訪に対する住民評価（先行研究）

○古屋（2024）は、高山市における観光客来訪に対する評価と個別要因との関連性に加えて、個別要因の影響の大きさやトレードオフを明らかにすることを念頭に、住民を対象としたアンケート調査を実施した。

○分析の結果、住民の観光客来訪に対する評価を改善し、向上するためには観光面での評価に誇りを持って、**シビックプライドの醸成**に資する取組みや、**経済的効果を適切に認識できる施策**が重要であると考えられた。



各カテゴリーの定数項からの差分（古屋,2024）

○観光客の来訪によって、交流の機会が増加、景観悪化、治安悪化の個別評価は低くなったとしても、観光客来訪に対する住民評価は大きなマイナスになっていないことが明らかとなった。

# 高山市でのヒアリング調査

○誘客効果の高い旅行会社や駐日外国公館等海外政府関係機関に直接的にPRしたり、海外旅行博や見本市に参加したりするなどの**積極的なプロモーション**。

○**多言語**にこだわりニーズにあった情報発信をしている。ホームページやパンフレットは9～12言語あり、国、地域のニーズに合わせて作成。

○観光関連事業者・従業員からは、労働力不足や原油高騰による利益圧迫などにより、観光客の人数の多さだけを追い続ける**観光施策への限界が指摘**されていた。そこで、観光関連事業者、従事者において仕事の満足度の向上等を行うことで、市民、地域において魅力ある雇用の創出を働きかけ、市民（地域）においては住みやすさ、旅行者歓迎度の向上等を行うことで、外国人旅行者に地域として旅行者をおもてなしすることを働きかけてきた。

○オーバーツーリズムの未然防止・抑制対策としての先駆モデル地域型にも選出され、「**with Respect**」を軸に、マナー啓発多言語周知ツールを作成し、駐車場等に看板を設置した。外国人観光客に加え、住民から好反応が得られた（観光庁,2025）。



with Respectの啓発看板（観光庁HPより引用）



# ハッピープラス株式会社でのヒアリング調査

## 事業内容

高山市近隣をはじめとする、日本固有の観光資源の活用、着地型及び体験型ツアーを実施。  
また、IT技術を活用し、日本人観光客は元よりインバウンド客への高山市の認知度を向上させ、高山市及び特定地域のファンを増やしている（ハッピープラス株式会社HPより）。

## 働き手の労働環境

ツアーガイドは登録制であり、20～70代の地元の方や高山に熱い思いがある人々が働いている。ツアーガイドの働き方も大切にしており、長く続けてもらえるような労働環境を整えている。



ヒアリング調査の様子  
（教員による撮影）

## 観光、地元を活性化させる

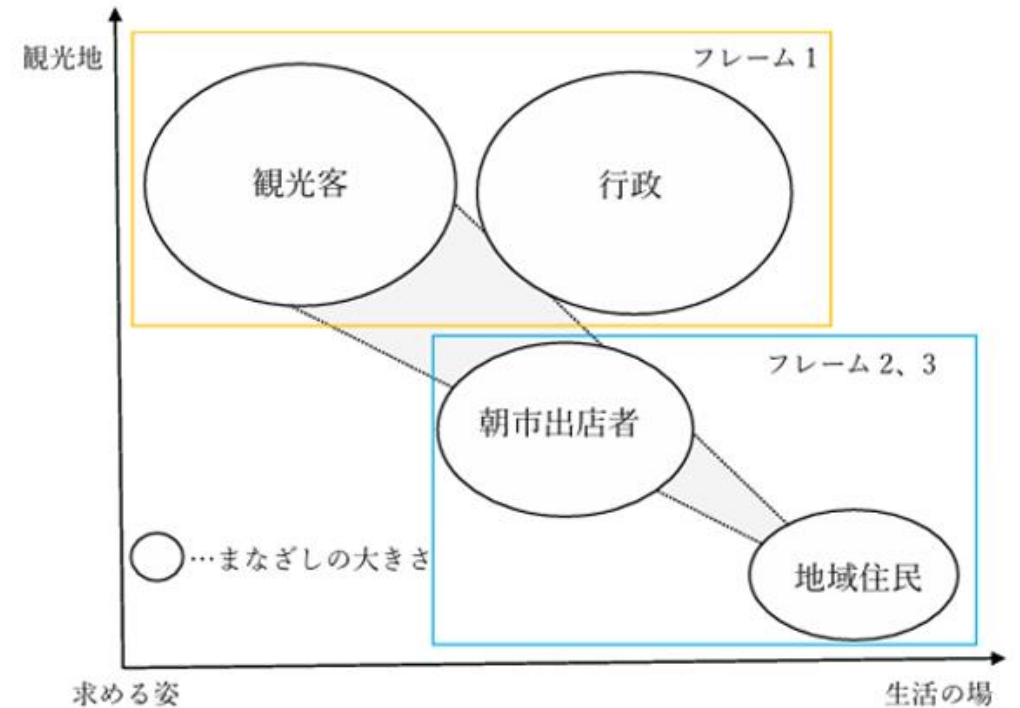
代表取締役である山腰様は地元である高山にUターンし、観光業を始められた。  
ハッピープラスは地域の外側から来る**観光客と高山市を繋ぐ架け橋**になりながらも、同時に内側から**高山市を活性化させる**という高山市の地元企業としても**二重の機能**を果たしている。

# 宮川朝市でのヒアリング調査（高山市）

○伝統工芸品を取り扱うお店や土産店、朝市などにおいて、幅広い世代の店主や店員の方が英語でお客様を接客しており、**多言語対応**を行っていた。

○「地元向けの日用品」扱いの商売を続けようとする側面と、「インバウンド観光向け」の販売機会を重視する側面とのあいだで、経営方針や品物の値段の設定における**揺らぎが発生**（足利,2025）。

○朝市出店者、地域住民、観光客のまなざしがそれぞれ異なっているように捉えられ、観光客の宮川朝市への“**観光地**”としてのまなざしが強く、地域住民や出店者による“**生活の場**”としてのまなざしがそれに押され**つつある**ような状態になっているのではないかと考えられた（足利,2025）。



宮川朝市における「観光」と「生活」フレーム  
（足利,2025より）

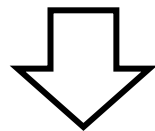


# 考察

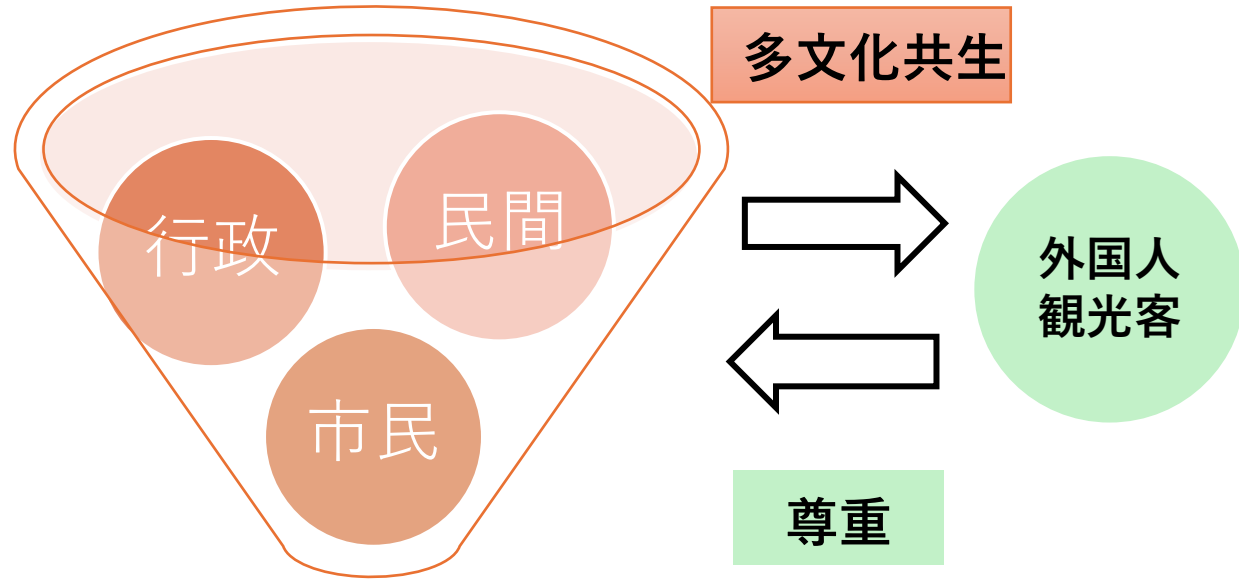
・行政は外国人観光客向けに多言語対応・マナー啓発を行い、民間企業はインバウンドに関する事業を通して地域活性化につなげる役割を担う

・異文化受容意識が訪日客歓迎意識に対して、正の影響を与えることから（張ら,2019）、市民はインバウンドの観光業が地域に与える経済面のプラスの影響について知り、観光地で生活する住民として誇り（**シビックプライド**）を持ちながら、**多文化共生**についても理解を深めていく必要がある（古屋,2024）。

・外国人観光客（ゲスト）は、観光地（ホスト）の暮らしに悪影響を与えないために、ホストの文化を**尊重**し、マナーを守る。



**観光地では観光と生活の間で揺らぎもあるが、折り合いをつけ、外国人観光客と観光地が共生するには「双方向のコミュニケーション」が必要となる**



ゲストとホストの関係性のイメージ図  
（筆者作成）

### 3, 住民参加型の保全活動を持続可能なものにするには（松崎 美海）

個人的な問い：

保護/排除の二分化でない生きもの、地域の歴史的背景や伝統文化との関係性

→ **市民協働の持続可能性**や**市民協働による影響**（特に外来生物の関心・認知の変化）について

学術的な問い：

地元に密着した実践的な活動を、専門家の参加・協力を得て柔軟な姿勢で積み重ね、積極的に伝達に努める姿勢（藤澤，2010）や、複数の主体が目標の達成のために調整を重ねながら動いていく「順応的ガバナンス」という形が注目されている（宮内，2013）。

→異なる立場の者が **どうかかわりあい、如何にして活動を進めていくのかや、どのようなアプローチで、人々の心や感情に触れ共感が生まれ、地元住民の支持，社会的理解が得られていく**（藤澤，2010）のか

社会的な問い：

岐阜県ではライチョウの保全活動の関心度が低い（朝日新聞社，2025）ことに懸念の声が…

→地域の生きものを守ることは、地域の伝統や文化を守ることに繋がる（楠田，2020）ことから、**「地域生態系保全」と「地域文化保全」の両立性**について

# “地域ぐるみ”であることの意義

自然再生推進法の定義：

過去に損なわれた自然環境を取り戻すため、関係行政機関、関係地方公共団体、地域住民、NPO、専門家等の地域の**多様な主体が参加**して、自然環境の保全、再生、創出等を行うこと。

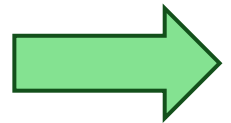
（環境省ホームページより）

→「多主体連携」が**法律においても**重要視されている。

保全活動において、人と生きものの関係性を意識することはもはやマストな要素であり、

**「人と自然のかかわり」を捉えてあるべき方向性を見出さなければ、持続可能な社会の姿は見えてこない**（富田，2014）。

生きものの保全活動は、生きものの周りを取り巻く**人や社会**の関係性も重視しながら、様々な立場が協働しあう**「地域ぐるみの活動」**が重要になってくる。



**地域の住民が主体的に参加できる「住民参加型」**のケースに着目



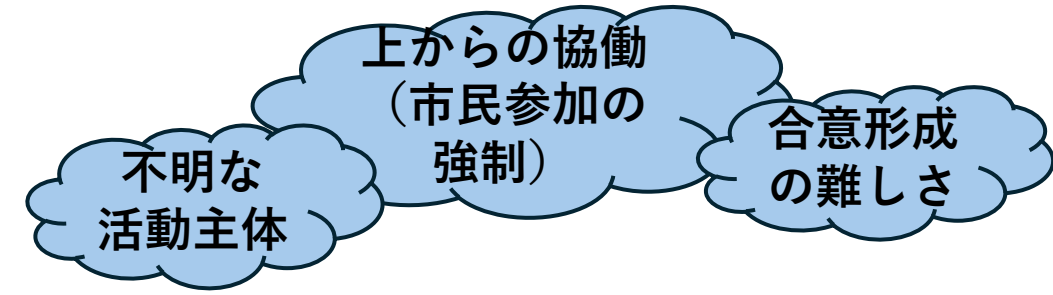
# 「住民参加型」の保全活動における効果と現状

鹿児島大学：「外来生物モニタリング調査報告会」の実施  
[効果] 特定外来生物の早期駆除、住民参加型の管理の重要性の再認識  
(南海日日新聞, 2025)



「外来生物  
モニタリング  
調査報告会」  
の様子  
(南海日日新聞社  
より)

今日の環境保全政策のなかでは、「市民参加」や  
「合意形成」などがどこでも謳われているように  
なっている。しかし、それらが現場で必ずしも  
すべてうまくいっているとは限らない(宮内, 2013)。



環境保全がうまくいかない要因

高山市では、**特定外来生物の駆除**

飛騨市では、外来生物でありながら**“地域のシンボル”**として**馴染んだ生きものの保全**

といった形で、生物多様性保全にかんする住民参加型の活動が積極的にすすめられている。

こうした**生きものの認識における多元性**を考慮しながら、「地域の生きものとかかわる」ことにおける**市民参加のこれからのあり方**を探るべく、現地調査を実施した。

# 高山市での聞き取り調査

対象植物：オオハンゴンソウ、オオキンケイギク  
(いずれも特定外来生物)

取り組み：

駆除活動に関するボランティア活動、講習会、  
駆除活動に対する助成金の交付、  
行政から自治会への駆除の呼びかけ 等

→市民に積極的に働きかけ、協働を促す  
**「地域ぐるみの活動」**が行われている。

現状と課題：

多くの市民が外来生物における理解を示す一方、  
一部の地区では活動に消極的な姿勢を見せるところも

→“**外来生物の扱いの難しさ**”が、理解を広げる  
うえでの足枷となっていた。



オオハンゴンソウ



オオキンケイギク

(高山市役所ホームページより)



聞き取り調査の様子（教員による撮影）

# ヒダスケ！での活動参加者への聞き取り

対象生物：コイ\*    \*コイは、科学的知見においては外来生物となっているが、その扱いは複雑なものとなっている。（馬淵・松崎，2017）

参加者の声：

「飛騨にとってなくてはならない存在」

「消えて欲しくないと感じるほど、あたりまえの存在」

「コイがいてこそ飛騨の街並みが完成する」

→活動の参加者のほとんどは、その複雑な実情を把握。その上で、コイを“**文化的景観**”の一つとしてとらえ、**地域ぐるみで**保全を行っていた。

多様な主体や世代がコイを通じて交流することは、**地域のコミュニティを活性化**する可能性も持ち合わせている。

→**地域活動を通して保全活動への理解や認識も深まっていく契機も見出せるのではないか**



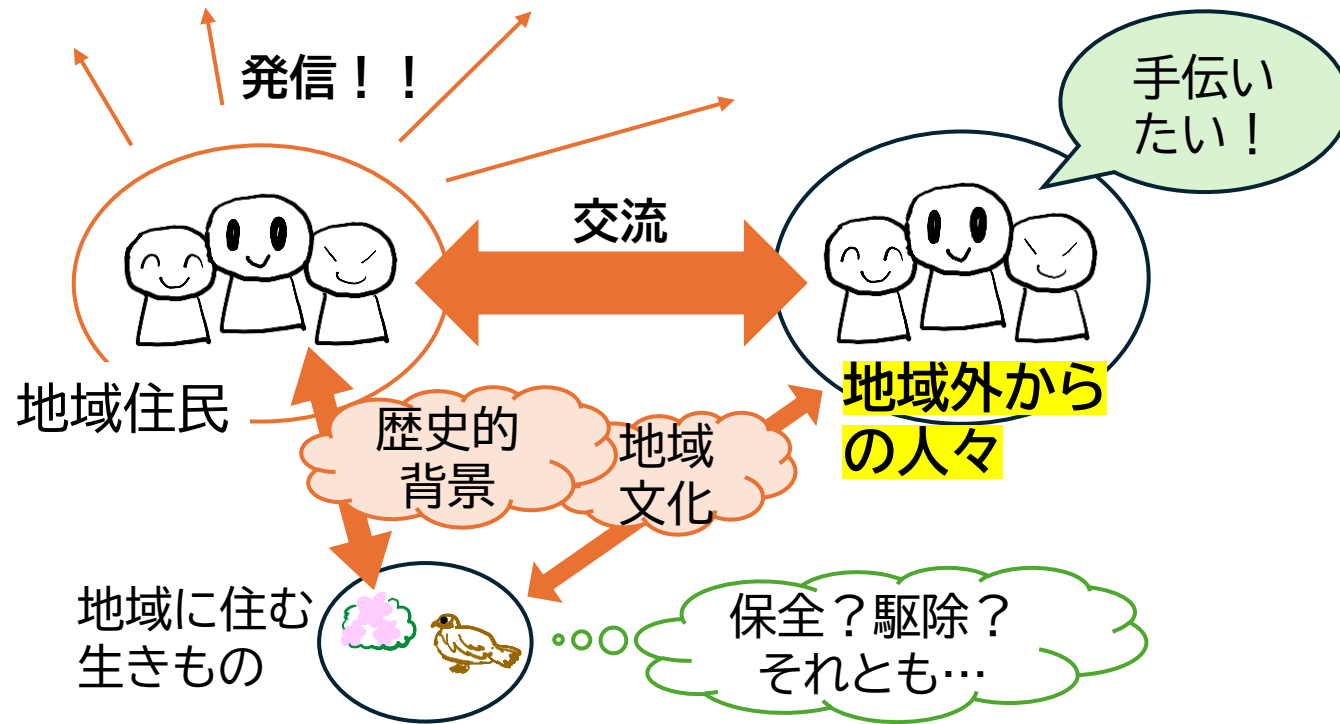
飛騨古川の水路を泳ぐコイの群れ  
（学生撮影）



聞き取りの様子（教員による撮影）



# “開けたコミュニティ”であることの効果性



地域の保全活動を地域ぐるみで実施することは、とくに維持管理の負担の増加において多くの地区で現実的な課題となっている（広田，2011）。

高山市における「保全/排除」の取り組みは多様に展開されていたが、だからこそ、「保全/排除」に係る**“開けた地域活動”**として再定置することで、さらなる可能性と展開をもたらすかもしれない。

保全活動においては多様な意見に対して、中立的に向き合うことは難しい（豊田，2017）。

それでも、**多くの人たちの考えとその相違点を共有し合い、その生き物について話し合い、**  
**かかわりあっていく開けた住民参加の在り方**が、これからの“生き物とのかかわり”問題を解きほぐしていくヒントになり得るのではないか。

# 地域資源の活用による持続性の創出と“開かれたコミュニティ”のあり方とは

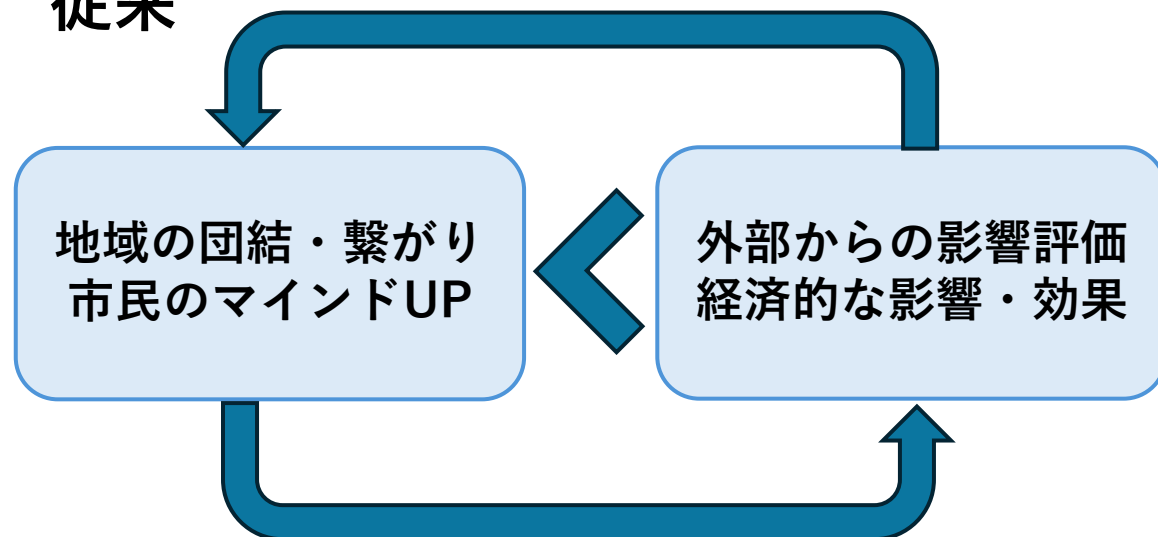
## 持続性の創出

- ☐ 平尾 観光客(聖地巡礼者)が主導者に加わり、主体性を自ら引き出していく  
コンテンツツーリズムの実践
- ☐ 大石 ホスト側の異文化の理解と、ゲスト側のホスト側に対する尊重の融合
- ☐ 松崎 「地域ならではの」自然や生きものを守ろうとする“想い”とそのかたち

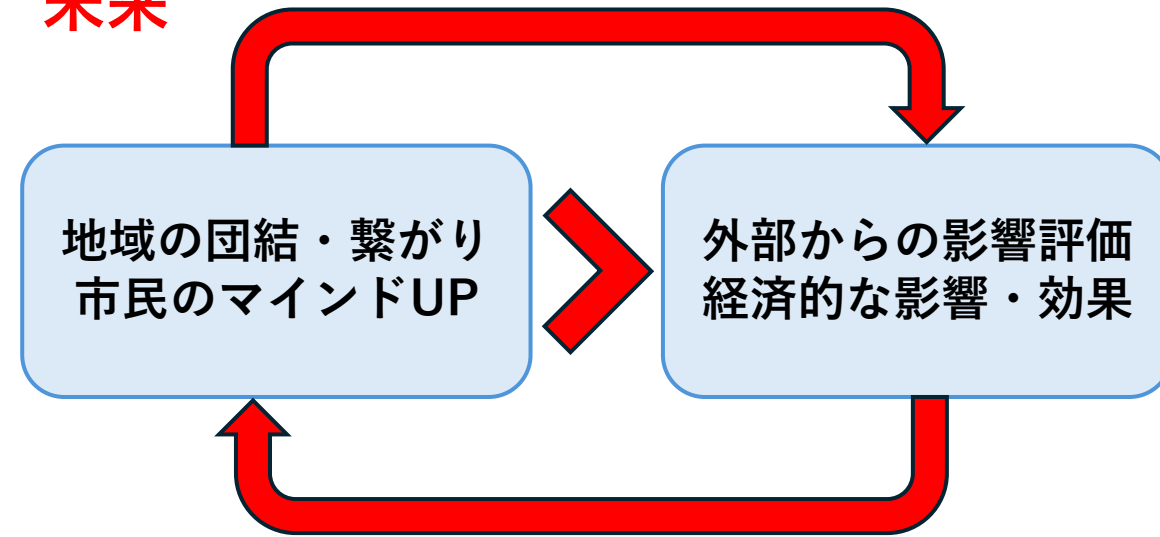
## 開かれた コミュニティ

- ☐ 平尾 外側の客観的な視点を持ちながら地域の内側と関わり続ける「関係人口」の創出
- ☐ 大石 行政、企業、市民が異文化を尊重し、それぞれインバウンドと関わり合いながら受け入れの寛容さを育む地域
- ☐ 松崎 地域内外にとらわれず、生きものとのかかわりを通して人々が交流しあえるまち

従来



未来



国際観光都市・飛騨高山に「地域内のつながり」から始まる新たな関わり方の循環の可能性を学ぶ！

# 参考文献

[全体]

- ・ 足利優衣,2025「地域資源の観光化を考える－飛騨高山宮川朝市における事例から」 『長崎大学環境科学部環境社会学研究室 小論考集・調査報告』 : 74 - 86.
- ・ 羽生冬佳ら,2006.「来訪者の観光地評価の構造に関する研究」 『ランドスケープ研究』 69(4): 301-306.
- ・ 石谷昌司,2023「観光地域づくりに求められる人材要素とは何か－岐阜県高山市役所からのインタビュー調査をととして」 『城西国際大学紀要』 32 (5) : 41 - 50.
- ・ 竹内治彦ら,2020「産業の担い手育成の課題について：高山市での調査に基づいて」 『地域創生』 39 : 1 - 15
- ・ 山元貴継ら,2016「岐阜県高山市におけるアニメ・ツーリズム－質問紙を用いた『アニメ聖地巡礼』行動把握の試み－」 『都市地理学』 11 : 44 - 58.
- ・ 林上編,2018『飛騨高山－地域の産業・社会・文化の歴史を読み解く－』 風媒社

[平尾]

- ・ 宋思佳、倪卉、章立、野田哲夫,2022「－全国アニメ聖地アンケート調査と事例調査を通じて－」 『社会情報学会 学会大会発表論文集』 125－130.
- ・ 高山市観光課.2024「聖地巡礼(コンテンツツーリズム等)に関する資料」
- ・ 飛騨市観光協会.2024「飛騨市観光協会の取り組みに関する資料」
- ・ 増淵 敏之,2009,「コンテンツツーリズムとその現状」 『地域イノベーション』 1 : 33－40.
- ・ 山村高淑.2011.『アニメ・マンガで地域振興－まちのファンを生むコンテンツツーリズム活用法－』 東京法令出版
- ・ 学校見学サイトプチキャン「WEBで学校説明会」  
(<https://campus360view.cfbx.jp/campus360view.com/>.2025年11月閲覧)
- ・ じゃらんnet.2018.“アニメ & 映画「氷菓」の舞台へ！飛騨高山で聖地巡礼旅【岐阜】”  
(<https://www.jalan.net/news/article/213548/2>.2025年11月閲覧)
- ・ 総務省.”関係人口とは“(<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html>.2025年11月閲覧)
- ・ まるっとプラザ.”氷菓交流コーナー“(<https://marutto-plaza.com/>.2025年11月閲覧)



# 参考文献

[大石]

- ・ 中野宏幸,高梨博子,2019「日米アジアの観光都市におけるインバウンド旅行者との対話的交流による地域のアイデンティティの形成に関する研究」『交通学研究』 62：69－76.
- ・ 森朋也,2019「インバウンドがもたらす地域社会の変容－多文化共生の視点に立った地域づくり－」『計画行政』 42 (3)： 21-26.
- ・ 古屋秀樹,2024「高山市における観光客の来訪に対する住民評価特性分析－持続可能な観光地マネジメントに向けたEBPMの実践を念頭として－」『観光研究』 36 (3)： 56-65.
- ・ 足利優衣（2025）「地域資源の観光化を考える－飛騨高山宮川朝市における事例から」『3年ゼミ調査合宿飛騨高山地域フィールドワーク 小論考集・調査報告』 74-86.
- ・ 張明軍、包薩日娜、星野敏、鬼塚健一郎、清水夏樹,2019「訪日客に対する地域住民の歓迎意識に関する研究 異文化受容意識とオーバーツーリズムに着目して」『農村計画学会誌』 38:187-194.
- ・ 観光庁（2025）「オーバーツーリズムの未然防止・・・抑制による持続可能な観光地域づくり（先駆モデル地域）」  
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001878831.pdf>
- ・ ハッピープラス株式会社  
<https://happy-plus.co.jp>
- ・ 高山市役所提供資料

[松崎]

- ・ 宮内泰介， 2013『なぜ環境保全はうまくいかないのか－現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社.
- ・ 富田涼都， 2014『自然再生の環境倫理－復元から再生へ』昭和堂.
- ・ 馬淵浩司・松崎慎一郎， 2017「日本の自然水域のコイ： 在来コイの現状と導入コイの脅威」『魚類学雑誌』 64 (2)： 213-218.
- ・ 藤澤浩子， 2010「自然環境保全分野における市民活動とその長期継続要因」『ノンプロフィット・レビュー』 10(1)： 37-48.
- ・ 楠田哲士， 2020「岐阜県民はライチョウが嫌いなのか」『岐阜県獣医師会報』 61(1)： 3-7.
- ・ 広田純一， 2011「環境に配慮した圃場整備における合意形成の手順と方法」『水土の知』 79 (3)： 175-179.
- ・ 豊田光世， 2017「地域協働による保全活動の推進に向けた合意形成」『日本生態学会誌』 67： 247-255.
- ・ 朝日新聞社， 2025年3月26日，『ライチョウ、身近な存在に 岐阜大・野鳥の会、「保全研究会」発足へ ／岐阜県』朝日新聞
- ・ 南海日日新聞社， 2025 年2 月17 日，「住民参加の重要性を再認識 外来植物モニタリング調査報告会 奄美市名瀬」南海日日新聞
- ・ 高山市 環境政策課，高山市 特定外来生物防除講習会資料－オオハンゴンソウ・オオキンケイギクの特徴及び駆除方法について
- ・ 環境省， 2025，「自然再生推進法の概要」自然環境・生物多様性 <https://www.env.go.jp/nature/saisei/law-saisei/gaiyo.html>
- ・ 高山市 環境政策課，特定外来生物防除について <https://www.city.takayama.lg.jp/kurashi/1000024/1000130/1001304/1008502.html>